【飼原牧場　採草地の植生改善】

飼原悠希氏は、畜産を始めて12年の32歳。
8年前に肥育牛100頭規模の牛舎を借り受け、繁殖雌牛と子牛計40頭、預託で肥育牛15頭を1名で管理。
現在は、山水が枯れてきたこと、堆肥撹拌装置の老朽化により、18頭に減らして飼養中。今後は、ハウストマト、スイートコーン、イチジク等による複合経営を目指している。

【ゆったりと寝転ぶ繁殖雌牛】

飼料ほ場は、牛舎から車で15分離れた農地1ha（前作はタマネギ）を購入。

令和2年は春蒔きでイタリアンライグラス（アキアオバ3）を作付けしたものの、知見がないため、どれがイタリアンでなにが雑草か分からぬまま、刈取りした。
2週間かけて15回に分けて青刈り給与、嗜好性は良く硝酸態窒素濃度にも問題なかったが、収量が低く夏雑草に覆われたため永年牧草で収穫量を増やしたい。
そこで、
令和2年秋蒔きで以下の優良品種実証展示ほ場を設置。
＜播種計画＞
2つのほ場に早晩生の異なる牧草品種を播種し、青刈り体系でも計画的な利用が可能となる採草地を目指す。
【38aほ場】
オーチャードグラス（まきばたろう（15kg））：中生、本州の基幹草種、収量性
フェストロリウム（那系1号（5kg））：中生、耐病性、越夏性、消化性

【播種前】

【62aほ場】オーチャードグラス（アキミドリⅡ（17kg））：極早生、秋の再生良好
フェストロリウム（那系1号（6kg））：前述

【薬剤散布後の様子】

種子は、混播しやすくミックスしたものを着払いにて（独）家畜改良センター茨城牧場長野支場より無償提供を受けた

【38aほ場】
施肥量は、ほ場の2／3に堆肥を10a当り約6t　⇒　38a×2／3×0.6t≒15t散布した。
堆肥あり区の草丈は約100cm、なしの区は10～15cmであった。石灰（20kg×42袋）、化成肥料を全面散布。

【62aほ場】
ロータリー耕での砕土深を15cmで、堆肥を部分的に約6t散布した。

＜播種作業手順＞
①石灰　⇒　②堆肥　⇒　③肥料　⇒　④耕起　⇒　⑤播種　⇒　⑥転圧
※播種は10月上旬、雨天に合わせ散粒器で播種し、後の雨を転圧に代替えした。

【飼原牧場　採草地の様子】

【採草一年目（令和3年4月20日撮影】

62aのほ場は、3月頃から順にヘアリーベッチが繁茂してきたため、15センチの高刈りで掃除刈りを実施。

牧草生育状況は、牧草被度が9割を占めており、草丈90センチほどに成長したオーチャードグラス（アキミドリⅡ）は、チラホラ出穂しているが、まだ出穂始めには至っていない。

オーチャードグラス、フェストロリウムともに生育は良好。所々にナルトサワギクとギシギシ根茎からの再生草がみられるのでの引き続き抜き取りを実施。

38aのほ場は、4月から牧草を15センチで高刈りし、ウインドローにしたまま、なるべく乾燥させてカサを減らして軽トラに積込み、給与。
牧草の伸びより、ヘアリーベッチの伸びが早いため、一番草の雑草（ヘアリーベッチ）混入率は70%となっており、乾燥が進みにくいため水分50%程度での仕上げで青刈給与とした。
ナルトサワギクの抜き取り作業を先行したため、刈り取りが後手後手となった。
牧草の被度は、80%で二番草以降翌年の収量は、期待できそう。

＜収穫管理作業の留意点＞
ウインドローでの乾燥を数日間、その位置のままで放置せず、なるべく移動させること。
積み残しのウインドローは散らして、下の牧草が蒸れないように、牧草に光が当たるよう再生を促すこと

刈取後、化成肥料（堆肥のほうが良い）の追肥を行うこと。
翌年の春に影響が出るため、10～11月に刈取しないこと。
刈り遅れは、2～3年後に株化し収量が落ちやすいことに留意して肥培管理を行うこと。